

序 問題の所在

本稿の目的は、ハイデガー（1889-1976）のアイデア論解釈から、彼の真性 *Wahrheit* の探求の進展を明らかにすることである。

ハイデガーにとってプラトンの哲学は、古荘がいうように「「哲学すること」一般の範型をそこに見いだしていたと言いうる古典中の古典」（古荘 [2011], 125）である。実際に彼の前期の主著『存在と時間』（1927、以下 *SZ*）がプラトンの『ソフィステス』からの引用で始まっていることから明らかなように、彼の思索の中心の一つにはプラトンの哲学があったといえる。細川も指摘するように、*SZ* における基礎存在論は、アイデア論を存在の意味への問いの中で捉え返すという射程をもっているのもであって、存在の意味への問いはアイデア論を範型としている⁽¹⁾。しかしプラトンの哲学の核心ともいうべきアイデア論は、周知のごとくハイデガーによって西洋哲学とりわけ形而上学の歴史を貫くものと解されるのであり、存在の意味への問いとして新たに始められる基礎存在論の試みによって、本来批判的に検討されるはずのものである。このアイデア論批判は、*SZ* 以後の中期の思索にあたる 1931/32 年冬学期講義『真性の本質について』（以下、『プラトン講義』）やこの講義をもとにした『真性にかんするプラトンの教説』（1940）において、より全面的に表れてくる。これが意味するのは、前期から中期への思索の展開に従って、ハイデガーのアイデア論に対する態度が変化しているということである。従って本稿の課題は、この態度の変化を彼の思索の展開の中に意義づけることである。

我々は、この課題に取り組む際に、ハイデガーの「洞窟の比喩」解釈に注目する。というのも、これからみていくようにハイデガーは、*SZ* の時期では存在の意味への問いの道筋を「洞窟の比喩」にそくして表現している一方で、『プラトン講義』では「洞窟の比喩」にそくして真性の探求を論じるようになるからである。細川は、ハイデガーの前期から中期の思索の変遷を「存在の意味から存在の真理へ」（細川 [1992], 7）と定式化するが、真性の探求がハイデガーの思索全体を突き動かす存在の探求に伴っていたというビーメル⁽²⁾の立場（Vgl. Biemel [1973], 35）に従えば、この変遷を同時に真性の探求の進展と捉える道も開かれている⁽²⁾。

本稿の議論は、以下の手続きをとる。第 1 節では、*SZ* にて提起された存在の意味への問いが、現存在の存在了解の可能性の条件への問いであり、ウー

シアを越えて善のアイデアへと向かうプラトンのアイデア論の図式を引き継いでいることを確認する。その上で、SZにおける真性の探求も同様に、「アイデア論の軌のもとにある」（細川[1992], 225）ことを明らかにする。第2節では、『プラトン講義』において「洞窟の比喩」が真性の生起する歴史として捉え返されていることを指摘する。さらにそこでは歴史的な真性から非歴史的な「正しさ」の真理へと変容する要因として、アイデアが批判されていることを示す。その上で我々は、SZの存在の意味への問い、そして実存の真性へと向かう真性の探求の道筋を歴史的に捉え返すものとして、『プラトン講義』をハイデガーの思索の中に位置づけ、「存在の意味から存在の真性へ」の主題の変化と「実存の真性から存在の真性へ」という真性の探求の深化がそこに表れていると主張する⁽³⁾。

第1節 洞窟から太陽へ——アイデア論の捉え返し

ハイデガーは、SZにおいて現存在の存在了解（存在者が「ある」ということにかんする漠然とした先行了解）を出発点にして、存在の「意味 Sinn」を問う基礎存在論を唱道した。このとき「存在」は、「存在者を存在者として規定し、存在者がどのように論究されようとも、そこへと向かって *woraufhin* 常にすでに了解されているところのもの」（SZ, 6）といわれる。この存在了解の向かう先である「そこへと向かって *woraufhin*」は、「企投のそこへと向かう先 *Woraufhin des Entwurfs*」（SZ, 151）というハイデガーの「意味」の規定へとつながる。従って、存在の意味への問いは、現存在の存在了解が向かう先にあるものを問うことであり、この「存在の意味」として「時間性 *Zeitlichkeit*」（SZ, 17）ないし「時節性 *Temporalität*」（SZ, 19）を提示することがSZの目標である。この問いは、1927年夏学期講義『現象学の根本諸問題』に従えば、「存在了解の可能性の条件」（GA 24, 397）の問いともいえる。本節では、SZ期の1926年夏学期講義『古代哲学の根本諸概念』と『現象学の根本諸問題』におけるハイデガーの「洞窟の比喩」解釈を通じて、存在了解の可能性の条件としての存在の意味への問いと、現存在の存在の「開示性 *Erschlossenheit*」（SZ, 38）としての真性の探求が、ともにプラトンのアイデア論の捉え返しであることを明らかにする。

『古代哲学の根本諸概念』では、「洞窟の比喩」における光の解釈から、現存在の存在了解とアイデアが明確に結びつけられて論じられている。

存在了解とは、存在者を存在者として照らす光を見ることができることである。プラトンが〔このことを〕比喩の中で語ったということは、偶

然ではない。というのも存在了解は、確かにイデアの問題とともに、そしてそれを通して初めて解明されるべきだからである（GA 22, 104）。

存在了解で見る光（イデア）は、洞窟の比喩の中では太陽、すなわち善のイデアを光源としている。この善のイデアは、「ウーシアを越えている ἐπιπέκεινα τῆς οὐσίας」のであり、ハイデガーの解釈によれば「存在者と存在をさらに越えた彼方」（GA 22, 106）にある。すなわち、存在了解の可能性の条件である存在の意味は、存在者と存在を超越した善のイデアの捉え返しと解することができる。このことに鑑みれば、細川が指摘するように、「存在者－存在－存在の意味（時間性）」の図式が、プラトンの「影－イデア（ウーシア）－善のイデア」と対応している（Vgl. 細川[2000], 72）。

さらに『現象学の根本諸問題』でも同様に、「洞窟の比喩」を論じた上で、存在了解を可能にする光、そしてその光源としての太陽に注目し、存在の意味への問いをイデア論と接続させている。

存在者にかんする認識、および存在を理解することの根本条件は、〔善のイデアが〕照らしている光のうちに立つことである。比喩表現なしに言えば、了解するとき、了解されるべきものを我々が企投してしまっているその先にある、何かあるものである。了解することは、それ自身、企投する先にあるものを、露呈されたものとして何らかの仕方で見なければならぬ。全ての露呈することのための先行的な露呈という根本事実、とても基礎的なので、光の中で見ることができる、すなわち光の中で見るという可能性によってのみ、何かを現実的なものとして認識するという相応な可能性がそのつど保証されるのである（GA 24, 402）。

この箇所、明確に存在了解の根本条件が、我々が企投してしまっているその先にあるもの、すなわち存在の意味として、善のイデアと結びつけられている。従って細川が主張するように、現存在の存在了解を出発点として、その可能性の条件である存在の意味を問う SZ の基礎存在論は、洞窟の中の影（存在者）から光（存在、イデア、ウーシア）、そして光源である太陽（存在の意味、善のイデア）へと向かう洞窟の比喩によって表現することができる（Vgl. 細川 [1992], 222 ff.）。

以上で存在の意味への問いが、イデア論と接続されていることを確認した。次に基礎存在論における真性の探求にイデア論の捉え返しがどのように表れ

ているかを見てもみよう。まずは、『古代哲学の根本諸概念』の中の次の記述から出発したい。

存在了解は、根源的にはこの〔善の〕イデアを見ることのうちにある。ここには、全ての真性を可能にする根本真性 *Grundwahrheit* 自体がある (GA 22, 106)。

「洞窟の比喩」によって表現される存在の意味への問い（善のイデアへの道筋）は、同時に根源的な真性へと向かう道筋でもある。じじつこの講義では、洞窟の比喩によって段階的な真性が語られている (Vgl. GA 22, 102)。さて、SZ 第 44 節で論じられる真性の探求は、命題に表れる伝統的な真理対応説の存在論的な根拠を問うことから始まる (vgl. SZ, 214)。ハイデガーは、「知性と物との一致」という関係性に真性を還元するのではなく、そもそも「一致」という関係性を成立させる条件へと探求を進める。この中で、現存在によって存在者が「覆いをとって発見されていること *Entdecktheit*」 (SZ, 218)、そしてそもそも存在者が発見されるために、現存在の「世界内存在 *In-der-Welt-sein*」 (SZ, 53) という存在体制に基づいて、世界が開示されていることが条件として剔出される⁽⁴⁾。現存在が世界内存在として開示されるということは、現存在自身の存在の開示とともに世界が開示されるということである。

現存在によって存在者が発見されることは、SZ の道具分析にて具体的に論じられる。すなわち現存在は、世界内部にある存在者を目的に適った存在者として一次的に発見する。このとき存在者は、「道具 *Zeug*」 (SZ, 68) として目的論的連関をあらかじめ形成している (Vgl. SZ, 68)。この目的論的連関の最終的な目的は、現存在自身の存在の可能性、つまり実存である (Vgl. SZ, 84)。現存在の実存へと向かうこの連関は、「何のため *Worum-willen*」として先行的に開示されている (Vgl. SZ, 85)。すなわち、「道具」とのかかわりに際して、常にすでに現存在の存在の可能性への連関が開かれているのである。このときに世界は、現存在にとって「有意義な *bedeutsam*」ものとして現れてくる (Vgl. SZ, 86 ff.)。

さて、以上のような現存在と「道具」とのかかわりを、今一度真性とのかかわりから整理すれば、次のことが明らかになる。すなわち、存在者が「道具」として発見されること（存在者の開示）と、その発見に先だって先行的に世界が開示されていること（存在者の存在の開示）である。この二つの段階の真性は、本稿では便宜上、SZ 以後の『根拠の本質について』（1929）の

用語を用いて、それぞれ「存在的真性」、「存在論的真性」と規定しよう（Vgl. GA 9, 130 f.）。手もとにある存在者を発見することによる存在的真性は、世界内存在としての現存在の存在の開示による存在論的真性によって可能となっている⁽⁵⁾。

有意義な世界から世界内存在としての現存在自身の実存へと向かう連関は、「何のため」として先行的に開示されていた。SZ 刊行直後の 1928 年夏学期講義『論理学の形而上学的始原根拠』においては、この「何のため」が善のアイデアと重ね合わされている。

我々が善のアイデア $\text{i}\delta\epsilon\alpha\ \tau\omicron\upsilon\ \acute{\alpha}\gamma\alpha\theta\omicron\upsilon\tilde{\iota}$ にそくしてみるようにならなければならぬのは、プラトンそしてとりわけアリストテレスが〈何のために $\text{o}\tilde{\iota}\ \acute{\epsilon}\nu\epsilon\kappa\alpha$ 〉として徴づけていた性格、すなわち〈のために umwillen 〉であり、そのものために存在していたり、あるいは存在していなかったり、かくかくであったり、あるいは違ったりするものである。存在者や、アイデアの王国をさらに越え出ていく善のアイデアは、〈のために〉である。（GA 26, 237）。

このように、現存在の実存へと向けられた有意義性の目的論的連関が、善のアイデアと結びつけられている。目的論的連関が最終的に行き着く現存在の存在の可能性、すなわち実存は、すでに『古代哲学の根本諸概念』の中でも、最終目的として善のアイデアと重ね合わされている（Vgl. GA22, 140）。つまり、「洞窟の比喩」における善のアイデアは、全ての認識を可能にする究極的に真なるものであるがゆえに、全てのものが目指すべき最終目的である。ハイデガーは、この善のアイデアを、あらゆる存在了解が向かう最終目的である現存在の実存として捉え返しているのである。

従って、SZ の真性の探求において、「洞窟の比喩」の段階的な図式（「影－アイデア－善のアイデア」）は、存在的真性、世界の開示としての存在論的真性、そして現存在自身の存在の可能性の開示、すなわち実存にとっての「何のため」に表れている。このハイデガーの真性の探求は、本来的で最も根源的な真性、すなわち実存の真性へと向かう道筋なのである（Vgl. SZ, 221）。存在の意味が、存在の可能性の条件としての善のアイデアの側面を捉え返したものである一方で、実存の真性は、我々が実存へと向かうことで存在了解および自己理解が明確になり自己の固有な存在が開示される最終目的地として、善のアイデアを捉え返したものである。

第2節 洞窟への戻りゆき——イデア論の歴史的な捉え返し

このように SZ 期の真性の探求は、「洞窟の比喩」にそくした段階的なものであることがわかった。この点では、基礎存在論における真性の探求もまた「イデア論の軌」のもとにあるといえる。さて 1931/32 年の『プラトン講義』では、再び「洞窟の比喩」が論じられる。ハイデガーは、この講義の中では根本的なアレーテイア(隠れなさ)、すなわち「不覆蔵性 *Unverborgenheit*」の経験へと遡ろうとしている。彼によれば、命題や判断に表れる「正しさ *Richtigkeit*」としての真理と、「不覆蔵性」としての真性は異なる経験に由来しており (Vgl. GA 34, 11)、命題の真理が現存在の開示性に基づいていたのと同様に、「正しさ」は「不覆蔵性」に基づいている (GA 34, 34)。しかし、実際に前面に出てきて自明視されているのは「正しさ」の真理であり、ハイデガーはこのように不覆蔵性が「正しさ」へと変容してしまい、取り違えられる現場へと遡ろうとしている (Vgl. GA 34, 17)。ハイデガーは、この正しさと不覆蔵性の取り違えの現場を、プラトンの「洞窟の比喩」に見出している。別言すれば、洞窟の比喩の中には不覆蔵性としての真性への道と正しさとしての真理への道の分岐点があるということである。従って、『プラトン講義』では、「洞窟の比喩」が単なる根源的な真性の道筋を表現するものではなく、不覆蔵性の経験が失われた現場として批判されるべきものになっている。このことは、ハイデガーの問いが存在の意味への問いから根源的な真性の問いへと変容したことにもかかわるはずである。本節では、ハイデガーにおける「洞窟の比喩」の役割の変化に着目し、この変化のうちに真性の探求の深化を見出す。

存在の意味への問いは、存在者、そして存在者の存在を超越したものへの問いとして立てられていた。ハイデガーは、すでに『古代哲学の根本諸概念』において、超越した存在の意味への問いとして立てられた存在の問い自体が、変容することを示唆している。

存在への問いは、それ自身を超越している。存在論的な問題が、轉換する *umschlagen!* メタ存在論的 *Metontologisch*、神学的 *θεολογική*、全体における存在者 *das Seiende im Ganzen*。善のイデアは、端的に全てに優先されるべきものであり、最前に出てくるもの *das Vorzüglichste* [最も卓越したもの] である。存在一般と優先されるべきもの。それは存在者のな**お彼方にあるもの**であり、存在の超越に属しており、存在の理念を本質的に規定するものである！最も根源的な可能性！全てを根源的に可能にするもの (GA 22, 106)。

ここで、善のアイデアは、存在了解を可能にする存在の意味であるにとどまらず、存在の意味への問い自体を可能にするもの（全体における存在者）への問いの契機になっている。それが「存在論的な問題の転換」であり、この変容は、『論理学の形而上学的始原根拠』の中で、基礎存在論の徹底によるメタ存在論への転換として提示される（Vgl. GA 26, 199 ff.）。メタ存在論の問題は、それ自体難しい問題を含んでいるので、本稿では詳しく立ち入らない⁽⁶⁾。さしあたり本稿にとって重要なことは、SZで準備された存在の意味への問いが、問いの超越性ゆえにその問い自体を可能にする存在者（全体における存在者）への問いに変容する可能性を含んでいるということである。そしてこの変容は、存在の意味への問いが立てられるための存在の不覆蔵性の経験へと歴史的に遡ることを要請するのである。ともすれば、根本的な不覆蔵性の経験へと遡ろうとする『プラトン講義』もこの要請によるものであるといえる。

囚人が洞窟の中から解放され太陽へと向かう段階までの『プラトン講義』における解釈は、今までの「洞窟の比喻」解釈と同様に解釈できる。すなわち太陽への歩みは、より不覆蔵なものへの歩みであり、その歩みには日常的に存在者を発見する存在的真性の段階、存在者の存在を了解する存在論的真性の段階、そしてそれら全てを可能にする善のアイデアの段階がある。アイデアは、「洞窟の比喻」の中では最も不覆蔵であり（Vgl. GA 34, 66）、とりわけ善のアイデアは存在者を不覆蔵なものにし、存在者の存在を了解させるアイデアの働きを最も本来的かつ根源的に担っている（Vgl. GA 34, 99）。善のアイデアは、ここでアイデアをアイデアたらしめ、存在者の存在や不覆蔵性を超越して力を発揮するものとされている（Vgl. ebd.）。この点に鑑みれば、『プラトン講義』において明確に「存在の意味」が主題になっていなくとも、すでに前節でみたのと同様に善のアイデアによって存在を超越した「存在の意味」が含意されているといえる。さらに最も不覆蔵なものへと向かう段階は、不覆蔵性が人間の実存を規定していく段階であることから（Vgl. GA 34, 75 ff.）、前節でみた SZにおける最も根源的な実存の真性への歩みがここでも表されているといえる。

しかし『プラトン講義』は、これまでの「洞窟の比喻」解釈とは異なり、解放された人間が再び洞窟に戻って囚人たちを解放しようとする段階にまで議論を進めている。そしてまさしくこの議論の中で、ハイデガーは、根源的な不覆蔵性の経験が失われ、「正しさ」が前面に現れる現場を暴き立てるのである。解放され最も不覆蔵な太陽を見た囚人は、いまや洞窟の中の影を影

として認識できる。彼が囚人たちを解放する際に、示さなければならないことは、影が影として不覆蔵なものであるがゆえに、より不覆蔵なもの（光や太陽）を覆蔵するものであるということである（Vgl. GA 34, 89）。ここにハイデガーは、覆蔵されているものと不覆蔵なものの対立と、不覆蔵性を同等に要求する存在者と仮象の対立を見て取る（Vgl. GA 34, 90）。この段階で初めて、不覆蔵性としての真性は覆蔵性を克服したものとして生起する一方で（Vgl. GA 34, 91）、偽なる仮象との対立としての「正しさ」の真理もまた生起している。従って不覆蔵性としての根源的な真性は、覆蔵性との「対決 Auseinander-setzung」（GA 34, 92）として生起するのであり、「洞窟の比喻」で最後に表立つ存在者と仮象の対立は、根源的な真性ではないのである（Vgl. GA 34, 93）。すなわちプラトンは、覆蔵性と不覆蔵性の対立として捉えられるべき真性を、正しいものと仮象の対立として捉えてしまったのである。この点で「洞窟の比喻」は、根本的な不覆蔵性の経験が失われ、「正しさ」に取り違えられてしまった決定的な場面である。

なぜプラトンは、不覆蔵性を扱っていたにもかかわらず、それを根源的に捉えることができなかつたのか。それは、「洞窟の比喻」でアイデアを最も不覆蔵なものとしていたように、不覆蔵性をアイデアに従属させたからである。アイデアは、その光によって「見る－見られる」という関係を可能にする（Vgl. GA 34, 101 ff.）。アイデアは我々に見られるべきものであり、アイデアを可能にする善のアイデアもまた、かろうじて見られる最も不覆蔵なものとして、しかも最終到達点として君臨する。このように不覆蔵性は、存在者に帰属するものとして、それ自身もアイデアである善のアイデアに隷属させられる。この点にこそハイデガーのアイデア論批判の焦点がある。すなわちアイデアが不覆蔵性よりも優位に立つことにより、不覆蔵性は不覆蔵なものとして見られる存在者に帰属するものになり下がる。従って、洞窟の比喻の中では不覆蔵性それ自体、そして不覆蔵性が克服すべき覆蔵性は問われていないのである（Vgl. GA 34, 123 ff.）。

プラトンは、不覆蔵性をアイデアに従属させることにより、アイデア、そして善のアイデアを最終的に到達すべき真なるものとして設定する。すなわちアイデアは、永遠の真理として鎮座している。ハイデガーが、「アレーテアが、ただ何か歴史的なもの *etwas Historisches*にとどまり、我々にとって歴史 *Geschichte* にならないのは、我々と同じくプラトンのせいである」（GA 34, 120）というときには、我々が「正しさ」の真理を自明視し不覆蔵性へと目を向けていないことと同時に、プラトンがアイデアによって覆蔵性との対立として生起する不覆蔵性から単なる静的な「正しさ」への変容を決定づけてしま

ったことを批判しているのである。実際ハイデガーは、不覆蔵性の動的な「生起 *Geschehen*」を「歴史 *Geschichte*」と結びつけていた。

真性は、不動産 *ruhender Besitz* ではないし、それを享受して我々があ
る場所に腰を据えて、そこから教示するのではない。そうではなく、不
覆蔵性は絶え間ない解放の歴史の中でのみ生起するのである (GA 34,
91)。

従って、覆蔵性の克服としての不覆蔵性は、洞窟から外に出て再び洞窟の中
へ戻りゆく人間の歴史において生起する。その意味で不覆蔵性は歴史的である。
しかし不覆蔵性は、イデアに従属することで、「正しさ」の真理として
非歴史的で静的な所有物になってしまうのである。

このように「洞窟の比喩」は、存在の意味あるいは実存の真性への道筋か
ら、不覆蔵性が歴史的に生起する場であり、かつ「正しさ」が台頭する場
になった。このことは、ハイデガーの思索の展開にとって、どういう意義があ
るのか。今までみてきたように SZ 期の存在の意味への問い、および真性の
探求は「イデア論の軌」のもとで遂行されていた。してみれば、『プラトン
講義』は「洞窟の比喩」を不覆蔵性が生起する歴史として捉え返すことによ
り、「存在者－存在－存在の意味」、「存在的真性－存在論的真性－実存の
真性」という図式もまた歴史的に捉え返している。この歴史的な捉え返しは、
蓋し洞窟の中へと戻ることによって遂行されているだろう。これが意味する
のは、存在の意味や実存の真性が善のイデアのような最終到達地としてでは
なく、不覆蔵性の生起の歴史の中でそれら自身も歴史的に生起するものとし
て捉え返されているということである⁽⁷⁾。従って、我々は『プラトン講義』
のうちに「存在の意味から存在の真性へ」というハイデガーの問いの変容を
すでに事柄として見て取れるし、現存在の実存の真性から存在の真性へとい
う仕方で彼の真性の探求の深化を見出すことができるのである。

結語

我々は、ハイデガーの「洞窟の比喩」解釈の変化を手がかりにして、『プ
ラトン講義』のうちに「存在の意味から存在の真性へ」あるいは「実存の真
性から存在の真性へ」という思索の深化を見出した。この思索の深化は、存
在の意味へと向かう基礎存在論から、その問い自体を可能にする全体におけ
る存在者を問題とするメタ存在論への変容の中で起こっているのであり、基
礎存在論とメタ存在論がいわゆる「存在－神論 *Onto-theologie*」として形而

上学の二重性に対応することに鑑みれば、ハイデガーの思索は形而上学の中にとどまっている。細川は、後年のハイデガーの言及に依拠して、存在の真理への問いがもはや形而上学的な問いではないことから、「存在の意味から存在の真性へ」の移行を 1936 年に見出している (Vgl. 細川 [1992], 430)。しかし 1931/32 年の『プラトン講義』が、形而上学にとどまりつつ存在の真性を問題としているのは明らかである。その点では、「存在の意味から存在の真性へ」の移行を 1930 年ごろに認めるペグラーの主張の方が、事柄としての射ている (Vgl. Pöggler [1974], 140)。1936 年までを「迷いの道」とするハイデガーの後年の言及 (Vgl. GA 15, 366) を信頼するならば、形而上学的に問われるべきではない存在の真性が形而上学的に問題とされているのは、このハイデガーの「迷い」を端的に表すものであろう。してみれば『プラトン講義』をもとにして書かれた『真性にかんするプラトンの教説』(1940) は、『プラトン講義』における「迷い」を脱したものであり、彼の思索の更なる展開として位置づけられるだろう。本稿ではこれを今後の課題としつつ、さしあたりは『プラトン講義』をハイデガーの思索の発展史の中に位置づけることで満足したい。

注

(1) 細川は、基礎存在論がプラトンのイデア論の捉え返しであるという解釈を提示しつつ、SZ がイデア論の軌のもとにあると主張する (Vgl. 細川 [1992], 222 ff. / 細川 [2000], 42 ff. / 72 ff.)。この点については第 1 節で詳論するが、古荘もこの細川の立場が、SZ におけるハイデガーのプラトン解釈の意義を考える上で、一定の共通了解になりうるという (Vgl. 古荘 [2011], 126)。本稿も基本的には細川の立場に賛同する。

(2) 細川によるハイデガーの思索の道の定式「意味－真理－場所」は、1969 年のゼミナールにおけるハイデガーの自己言及に基づいている (Vgl. 細川 [1992], 47)。周知の通り、ハイデガーの自己言及は多分に自己改釈を含んだものであり、慎重な扱いが要求される。この点からして、後年のハイデガーの自己言及に無批判に依拠する細川の図式は問題含みであり、本稿が明らかにするように事柄としてのハイデガーの思索の変遷を取り逃がしている。

(3) ハイデガーの「洞窟の比喩」解釈を扱う研究は、1940 年の『真性にかんするプラトンの教説』を中心に論じることが多く、その素材となった 1931/32 年の『プラトン講義』をハイデガーの思索の中に十分に位置づけているとは言い難い。現にハイデガーの真性の探求の展開を扱う研究や、ハイ

デガールとプラトンの関係を扱う研究の中で、『プラトン講義』はそれ自体として扱われていない (Vgl. 細川 [1992] /相楽 [2014] /小島 [2016] など)。ラサルの研究は、管見の限り『プラトン講義』を単独で解釈している数少ない研究の一つであるが (Vgl. Wrathall [2010])、ハイデガールとプラトンの距離感を明瞭にしている一方で、ハイデガールの思索の発展の中での位置づけにかんして十分に踏み込んだ議論をしていない。本稿の動機は、この『プラトン講義』をハイデガールの思索の発展史の中に十分に位置づけることである。

(4) 「覆いをとって発見する *entdecken*」は、古代ギリシア語で「真であること *Wahrsein*」を意味する「アレーテウエイン *ἀληθεύειν*」の訳語である。1925/26 冬学期講義『論理学』において、この「アレーテウエイン」という語が、「ア *α*」という否定辞と隠れを表す「レーテー *λήθη*」から構成されていることにハイデガールは注目し、何か隠れている状態を取り去ること (「不覆蔵性 *Unverborgenheit*」) として真性を理解する (Vgl. GA 21, 131)。本稿第 2 節でこの「不覆蔵性」は、ハイデガールの真性の探求の重要語になる。

(5) SZ の真性をこのように整理するのは、岡田の研究による (Vgl. 岡田 [1999], 1)。

(6) メタ存在論にかんしては多くの先行研究があるが、例えば細川 [1992] や轟 [2007] を参照。

(7) SZ の第一編第二部第五章においても、すでに歴史性が主題となっており、現存在の生起が歴史性と結びつけられ解釈されている (Vgl. SZ, 375)。ここに『プラトン講義』の議論の萌芽を見て取ることはできるが、しかし重要なのは、SZ では現存在の歴史性が主題なのに対して、『プラトン講義』では不覆蔵性の歴史性が問題となっていることである。ハイデガールは、SZ で哲学史の背景にある存在了解を批判的に検討する「伝統的な存在論の歴史の解体 *Destruktion*」という課題を提示していた (Vgl. SZ, 19 ff.) が、実際の公刊部では遂行されることはなかった。この存在論の歴史の解体は、プラトンのイデア論を範型とした SZ の公刊部の議論自身に対しても遂行されるはずであり、須藤のいうように壮大な循環を孕んでいる (Vgl. 須藤 [2020], 90)。従って、まさしく『プラトン講義』において SZ で遂行されるはずだった存在論の解体が、イデア論の明確な批判という仕方で行われているといえる。

文献表

(一次文献)

ハイデガーの著作からの引用は、以下の略号を用い、括弧内に略号と頁数を併記して箇所を示す。ハイデガー全集 (Martin Heidegger, *Gesamtausgabe*, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann, 1975-) については、略号とともに巻数を併記する。たとえば、(SZ, 316) であれば、*Sein und Zeit* の 316 頁、(GA 26, 199) であれば、ハイデガー全集 26 巻の 199 頁を表す。

- SZ *Sein und Zeit*, Tübingen: Max Niemeyer, 19 Aufl., 2006
GA 15 *Seminare*
GA 21 *Logik* (Wintersemester 1925/26)
GA 22 *Grundbegriffe der antiken Philosophie* (Sommersemester 1926)
GA 24 *Grundprobleme der Phänomenologie* (Sommersemester 1927)
GA 26 *Metaphysische Anfangsgründe der Logik* (Sommersemester 1928)
GA 34 *Vom Wesen der Wahrheit* (Wintersemester 1931/32)

(二次文献)

Biemel, Walter, *Martin Heidegger*, Hamburg: Rowohlt, 1973 [W. ビーメル
『ハイデガー』、茅野良男監訳、理想社、1986]

Pöggeler, Otto, *Philosophie und Politik bei Heidegger*, 2. um ein Nachwort
erweiterte Auflage, Freiburg/München: Karl Alber, 1974

Wrathall, Mark A, *Heidegger and Unconcealment Truth, Language, and
History*, Cambridge University Press, 2010

岡田紀子『ハイデガーの真理論』、法政大学出版局、1999年

小島和男「プラトン 豊かな暗闇」、秋富克哉ほか編『続・ハイデガー読本』
所収 (20-27頁)、法政大学出版局、2016年

相楽勉「真理概念の変容」、秋富克哉ほか編『ハイデガー読本』所収 (196-205
頁)、法政大学出版局、2014年

須藤訓任『『存在と時間』第2編評釈——本来性と時間性』、岩波書店、2020
年

轟孝夫『存在と共同 ハイデガー哲学の構造と展開』、法政大学出版局、2007
年

古荘真敬「形而上学の根源をめぐって——ハイデガーのプラトン解釈の一側
面——」、『理想』686号所収 (125-137頁)、理想社、2011年

細川亮一『意味・真理・場所』、創文社、1992年

——『ハイデガー哲学の射程』、創文社、2000年